

久保田悦子です。

国は、流域住民・熊本県民のダムに反対する意見や疑問を無視したまま河川整備計画を策定し、川辺川ダム建設を強行しようとしています。

知事もほとんどの市町村長も、「ダムがあれば多くの命が救われた、浸水範囲を6割低減できた、流水型で清流も守られる」という国交省の言葉をうのみにして、ダム建設を容認しています。

環境アセスについて、知事は国が法に準じたアセスを実施していると言いますが、実際は、住民の意見を聴くという法の趣旨を無視し、形ばかりの意見集約にとどまり、2023年12月には「環境影響評価準備レポート」を公表しました。

「環境影響評価準備レポート」については、流域の首長からも「住民に分かりやすく、丁寧な説明をするよう求めがあったにもかかわらず、説明会では、質問に答えられないばかりか、人吉市では、一方的に質問を打ち切りました。

又、今回の公聴会も、限られた場所や日程に絞り、文書での意見書も受け付けず、回答をするわけでもない等の、住民を無視した形ばかりの意見集約になっています。「公聴会があることを知らなかった、もっときちんと知らせるべき」等の不満が出ています。これでは、法に準ずるアセスとは。とても言えません。

1月20日、国土交通省元防災課長で河川行政一筋に取り組んでこられた宮本博司さんは、講演会で「ダムの効果は限定的」で、「基本方針自体は説明できないフィクション」、「つじつまを合わせようとする『ウソ・ごまかし』につながってしまう。行政は決めたことにこだわらず、現場の事実に向け、住民の命を守り、自然豊かな球磨川を実現するために行政と住民が一緒に取り組むことが必要」と話されました。

宮本博司さんは、「流水型ダムでも必ず土砂が堆積すると」言われています。

又、元 熊本大学教授、理学博士で、昭和60年には昭和天皇に御進講を行った松本幡郎(はたお)さんは、繰り返し現地を訪れ、調査し、ダム湖周辺の地盤が脆弱であるという事を、強調されていました。

松本氏は著書の「川辺川ダムの地学的問題」では、自らが書き上げた「川辺川ダムサイト説明図」にダムサイトとして地質が悪く危険である場所を赤色で示して、「この図面を一瞥すれば、誰でもここはダムサイトとして良くないと思われ

るであろう」、「事実、筆者は書きあげた図面を見て、あまりの不良さ、危険度の高いのに愕然としたのである。あるコンサルタント技術者(すくなくとも4か所の調査、設計した技術者)も何故あのように悪い場所をダムサイトに決めたのかわからないとあきれていた」と述べています。

洪水時に1億3千万トンもの水をためた時に大規模な崖の崩落はあり得ることです。今回の「環境影響評価レポート」には、地盤が脆弱な事、大規模な崩落の危険性の指摘、対策、環境に及ぼす影響は示されていないようです。しかし、想定しなければ正しい対策も打てないし、建設そのものの是非も論議になりません。この点について突っ込んだ論議が必要だと思います。

洪水時に大量の土砂や流木が流れ込み、常用洪水吐が塞がれた場合に放流ができず洪水調節ができない場合も考えられます。

これまでも、流水型ダムでも、7.4洪水時の1.4倍の雨で緊急放流を行うと国交省も言っていますが、洪水調整ができないために緊急放流を実施する事態になりかねず、ダムの構造的な欠陥が洪水被害を拡大するという事になってしまいます。

宮本博司さんも、緊急放流は「入ってきた雨がそのまま流れるのではない」

「エネルギーがため込まれている」と話されています。国交省も緊急放流時の急激な水位の上昇は認めており、洪水被害を招く恐れがあります。ダムは危険、住民はダムを求めています。

更に、洪水後も、大量の堆積土砂や流木が残ることも考えられます。国交省は除去対策を講じるとしていますが、「掘削除去のため、ダム建設時に、ダム上流河床域に重機用の道路が設置され、日常的に重機が作動している状態になれば、「通常時にはダムが無い状態の河川を維持する」という流水型ダムの前提が大きく崩れます。観光面でも魅力ある川の姿は失われてしまいます。

知事は、命を守るために、清流を2次的に考えられているのかもしれませんが。しかし、「人吉では、多くの人々が支流災害で亡くなっており、ダムがあっても、7.4 水害時の人たちの命が守れなかった」という現場の声が事実なら、全ての前提が崩れてしまうのではありませんか。

「球磨川は地域の宝、ダムによらない治水対策を極限まで追求する」と言われた知事の言葉を撤回する理由は全くなかったという事になります。

又、レポートで環境影響についても、周辺の希少生物・植物、この地域に住む動物の生死についても、一定の影響は否定しないが、対策をとれば許容範囲内と結論づけるのは、まさにダムありきの強行論で無責任の極みです。

私は、多良木町の球磨川のすぐそばに住んでいます。夫は、子供のころの球磨川がどんなにきれいで豊かだったかを話しますが、市房ダムができて以来、今の球磨川は、土砂が堆積し、すぐに濁り、清流などとは恥ずかしくて呼べません。魚影も見えず、釣り人も、釣り船も姿を消しました。ダムは造ってしまえば取り返しができません。

今日の熊日新聞社説も「安心と納得感はまだ遠い」として、「水質悪化や生態系への悪影響を不安視する意見は根強い」、川辺川ダムの問題は長らく県民世論を分断してきた。蒲島県政は民意を重んじるとしつつ右往左往した印象は否めない。今後の判断についても、県民が広く同意できるものであってほしい」と述べています。

相良・五木村長は、ダム建設に対する態度を明確にしません。

相良村長は、「日本一の清流川辺川を未来に残したい」と言われています。

知事は、この両町村長を説得して、ダム建設を強行するのではなく、共感し、住民が求める共同検証を行い、事実に基づく判断を行って、ダム建設を強行せず、中止を含めて検討してほしいと思います。